

釧路市教育委員会 令和5年第12回6月定例会会議録

1 日時：令和5年6月16日（金）13時30分から15時00分まで

2 会場：釧路フィッシャーマンズワーフMOO 2階 教育委員会室

3 出席者

岡部義孝教育長

（教育委員）

山口隆委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員、靱山彩子委員

（事務局）

齋藤学校教育部長、工藤生涯学習部長、本川教育指導参事、森学校教育部次長、大島総務課長、西崎施設計画主幹、小西教育政策主幹、齊藤総括指導主事、神谷給食担当主幹、及川北陽高校事務長、澤口生涯学習部次長、乙黒スポーツ課長、鈴木動物園長

4 議事録署名人 種村委員、靱山委員

5 傍聴人数 0人

6 提出案件

【公開案件】

報告事項

- （1）義務教育学校開校準備協議会（大楽毛地区・音別地区）の開催結果について
- （2）まなびや鳥取の利用状況について
- （3）令和5年度釧路市高等学校等広域通学費助成制度の利用状況について
- （4）学校の現状について

7 会議内容

【公開案件】 報告事項

(1) 義務教育学校開校準備協議会（大楽毛地区・音別地区）の開催結果について

(小西教育政策主幹)

報告事項1、義務教育学校開校準備協議会（大楽毛地区・音別地区）の開催結果について報告する。

令和5年5月定例教育委員会にて大楽毛地区、音別地区における義務教育学校開校準備協議会の設置について報告した。今回は第1回目の開校準備協議会について報告する。音別地区においては、6月5日（月）18：30から音別中学校体育館にて、大楽毛地区においては、6月6日（火）18：30から大楽毛中学校3階コンピュータ室にて開催した。両協議会とも、岡部教育長から委員へ委嘱状を交付し、その後、協議会で会長、副会長を選出した。議事について、協議会は原則公開することとし、「令和8年度開校までの大まかなスケジュール」、「協議会における協議内容等を周知する方法として協議会ニュースを協議会開催後に都度発行すること」、また、「新しい義務教育学校の校名の決定方法」について協議した。

協議の結果、校名については両協議会とも公募することとなった。なお、公募の対象については、両協議会とも「対象校関係者」となり、音別地区については音別小、音別中の児童生徒、地域の未就学児、保護者、教職員、音別地区の地域住民、音別小、音別中の卒業生となった。大楽毛地区については大楽毛小、大楽毛中の児童生徒、地域の未就学児、保護者、教職員、大楽毛地区の地域住民、大楽毛小、大楽毛中の卒業生、また、通学区域の一部に鶴野小学校から編入される箇所があるため、鶴野小学校の児童生徒、保護者も対象とすることが協議会で決定された。公募期間については、7月から8月にかけての1カ月間で校名を公募することとし、今後は協議会ニュースを発行するとともに、周知については関係団体への働きかけや、市HP、Facebook、市公式LINE、報道各社への依頼も含めて行っていく考えである。

今後の協議会の大きなスケジュールは、学校名の公募終了後に大楽毛地区、音別地区ともに、9月ごろ開催予定の第2回会議、10月ごろ開催予定の第3回会議の2回の審査を経て決定していくこととなった。また、校名決定後は校歌、校章なども協議していく予定となっている。教育委員会には協議が進んだ段階で、都度報告したいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

(山口委員)

校名については公募をするという報告、説明を受けたが、10月から3月頃の第3回から第4回にかけての内容に、校歌、校章、校旗についてと資料に記載があり、校名と同様に公募をすることを考えているのか、それとも協議会の中で出た意見を中心に判断していくのか

教えていただきたい。

(小西教育政策主幹)

校歌、校章などは協議会での協議を以て決定していくこととなる。阿寒湖義務教育学校の際には、協議会の中で校歌も校章も小学校の内容を引き継ぐことが決定された。東栄小学校、柏木小学校、日進小学校、旭小学校、寿小学校、駒場小学校、新川小学校も統合の際にも、協議会において決定するとしていたため、各協議会の判断をお願いすることになっていく。

(山口委員)

教育委員会にも報告していただけるということであったが、年4回程度発行予定の協議会ニュースについても、私たちに見せてもらえるような手立てを取っていただきたい。

(小西教育政策主幹)

都度、教育委員の皆様にご報告させていただく。

【公開案件】報告事項

(2) まなびや鳥取の利用状況について

(齊藤総括指導主事)

報告事項2、まなびや鳥取の利用状況について報告する。

「まなびや」は、学校の教育課程を基盤とし、不登校児童生徒の学習を行う施設として開設していた「空学学級」と「ふれあい教室」を統合し、個々の不登校児童生徒の実態に応じた個別学習を中心とした不登校支援対策を充実させる目的で、『釧路市教育支援センター「まなびや城山」』として、今年度より、城山小学校内に設置したものである。さらに「まなびや」の分室として、就学児童生徒数が多い、鳥取地区、昭和地区を対象にした「まなびや鳥取」を開設した。当面の間は週2回、火曜日と木曜日の午前9時から12時まで、コア鳥取の1室を借り、5月9日より稼働している。

6月9日現在、火曜日には中学生1名、小学生1名、木曜日には中学生1名が通室している。指導員としては、岩崎指導員と佐藤家庭教育推進委員の2名体制で実施しており、男性女性それぞれ1名ずつで対応する体制となっている。通室した児童は各自が用意した個別の学習を行い、指導員との会話ややり取りを楽しむといった姿が見られている。また今後も小学生2名が通室を希望している。

今後は、まなびや鳥取の人数が増え、通室する生徒の状況を確認しながら、9:00から15:00までの活用も検討していく。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

(靱山委員)

以前、小学校の校長先生に不登校についての話を伺った際に、午後からであれば学校に登校できる児童や、他児童の下校後であれば登校できる児童がいるという話を聞いた。児童が

そのような気持ちであるため、学校ではそれに合わせた対応を行っているとのことである。そこで質問の1点目となるが、もし、そのような児童生徒がまなびやに興味を持ち、その児童生徒が午後であれば通所できる、もしくは15時以降の通所を希望される場合は対応できるのか。2点目として、城山でも同じような活動をしているが、午前、午後に限らず、時間をずらして参加している児童生徒の現状があれば教えていただきたい。

(齊藤総括指導主事)

1点目の午後からの通所について、基本的にまなびやを利用する場合は児童生徒の状況を確認しながら、その子に応じた指導が基本となるため、適切に対応していくこととなる。現状では午前中に部屋を借りているため、午後にも必要性が生じた場合には、午後の貸し出しも検討していく必要があると思っている。2点目のまなびや城山の現状について、朝から登校できない児童生徒が実際にいる。そういった場合はその子の登校状況に合わせて、個々に応じた指導を行っているところである。

(靱山委員)

まなびやの利用を検討している児童生徒や保護者にまなびやを紹介する場面があると思うが、その際にこの曜日の午前中だけ利用可能という言い方ではなく、このような場所があつて相談できるという声掛けをすると、保護者も相談に来やすいと思う。

(齊藤総括指導主事)

基本的には通室を利用する前に教育委員会の指導主事が面談をする形で対応している。その際に活動時間について説明するが、ニーズに応じてその範囲の中で自由に設定できることを伝えている。

(種村委員)

実際にはどういった内容を行っているかを聞きたい。普段小学校に通っていて、学校に多少通いながらもまなびやに通うことも可能であるのか。

(齊藤総括指導主事)

可能である。

(種村委員)

個々に合わせて指導していくということであるが、実際に学校で使っている教科書を使うのか、あるいはそうではない教材を提供しているのか、どのような形をとっているのか。

(齊藤総括指導主事)

基本的には教科書やプリントを活用する。学習という場でいうと、個別に応じた対応ということで、その子の状況に合わせた学習を行っていく流れとなっている。

(種村委員)

中学生であると成績が5段階評価で付けられるが、そういったところに関しては踏み込まないということか。

(齊藤総括指導主事)

中学校での定期テスト等の日は在籍校に登校してテストだけ受けてもらい、そこで点数がしっかり取れていれば、当然成績も付く。

(山口委員)

城山の方には遠方で通にくい人がいるため、西部地区、鳥取地区に開設したという説明を受けた。若干名ではあるが利用者がいるということで、良いスタートができていていると感じた。説明の中では、現在は火曜日と木曜日の週2回であるが、当面の間ということであった。城山の方は月曜日から金曜日まで開設しており、鳥取のまなびやを利用している子どもたちの希望として、もっと通いたい、毎日通いたいという希望が出てきたときには対応することも可能であるのか。

(齊藤総括指導主事)

短期的なものでいうと、借り受けている予算の関係があるため、まなびや鳥取に関しては多少制限を加えなくてはいけないというのが現状である。そのような場合は、城山にお願いするような対応になるかと思う。鳥取地区、昭和地区は在籍生徒数が多いため、今後増えていくようであれば中期的な観点でいうと、まなびや鳥取の拡充、もしくは場所の検討をこれから進めていかななくてはならない。

(小出委員)

不登校で休んでいる児童生徒数はかなりいると思うが、それを考えると、ここに通っている人数は少ないと思う。学校に行けないため、このような場所にも行けない子が大多数だと予想している。そのため、どの段階でこのような場所があると保護者や子どもに伝えているのかを知りたい。

(齊藤総括指導主事)

不登校児童生徒の定義として、30日以上欠席というのが前提になっている。不登校の中でも学校に週1、2回程度通えている子もいれば、まったく通えていない子もいる。特にまなびやでは、まったく学校に通えない、集団生活に馴染めない、学校生活の規律自体に馴染めない児童生徒に対して、効果的な活用ができると考えている。そのように考えると、不登校全体の数に比べて、まったく学校に通えない児童生徒数はそこまで多くないと捉えているところである。

(山口委員)

学校と子ども、家庭のつながり方というのは、いろいろな形を用意していると思う。最近、オンラインで学校とつながり、登校はできないが、学校の授業をオンラインで配信してもらい、家庭で授業を受けることもシステムの的に可能となっている。実際、そのような子どもの数は教育委員会でおさえているのか。

(齊藤総括指導主事)

学校教育指導の中でそのような場面を見かけてはいるが、具体的な数字の把握まではできていない。学校の中でオンラインを活用し、不登校児童生徒に対しての学習保障を行っている人数はまだおさえられていない。

(山口委員)

ふれあい教室、さわやか学級、青空学級などが開設されている時に、オンラインで教室とつながるようになった。原籍校の授業をまなびやで受けるケースは実際にあるのか。

(齊藤総括指導主事)

実際に今稼働しているところである。それに関しても個々の児童生徒の状況によるため、中学校の授業に学習状況が合致するのであれば、そういった接続の仕方もあるというところで、学校と接続しながら対応していく。

(山口委員)

不登校の中でも、自分の在籍している学級と関わりたくない、担任の先生の授業を受けたくないという理由で登校拒否している子どもがいると思う。そのような子のために、違う学校の違う先生の授業を配信するというのも可能であると思うため、今後そのようなことも検討していただきたい。

【公開案件】 報告事項

(3) 令和5年度釧路市高等学校等広域通学費助成制度の利用状況について

(森学校教育部次長)

報告事項3、令和5年度釧路市高等学校等広域通学費助成制度の利用状況について報告する。

本助成制度は令和5年度からの新規事業であり、自宅から高等学校等に遠距離通学する生徒を対象に、1か月あたりの通学費が高額になる家庭に対して、経済的負担の軽減を図るため、通学費の助成を実施するものである。

この制度の対象となる方は、「釧路市内に居住し、釧路管内の高校等に通学している方」、「通学定期券を利用して路線バスまたはJRで通学している方」、「1か月あたりの通学定期券の合計購入金額が10,800円を超えている方」、「他の法令や助成制度等による通学交通費の補助を受けていない方」となっている。なお、助成金額は、1か月あたりの通学定期券の金額のうち、10,800円を超える額の2分の1である。

対象となる方に広くこの制度を知っていただくため、阿寒バスや、釧路管内の各学校への制度説明、釧路市ホームページや広報くしろ6月号への掲載、教育委員会等へのリーフレット設置など、周知活動にも力を入れている。令和5年5月末現在の状況は、応募者数15人に対し、助成対象決定数は11人であり、対象外が3人、保留が1人となっている。なお、申請は来年2月末まで随時受け付けている。最後に、助成対象となった方の内訳は、釧路地区から阿寒高校へ通学している方が10人、音別地区から湖陵高校へ通学している方が1人となっている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

(岡部教育長)

保留というのはどういうことなのか。

(森学校教育部次長)

保留の方は釧路市内から標茶高校に通っている方で、標茶町の補助助成制度にも提出しているため、そちらの方が金額が高いことから、決定が決まった場合、標茶町の方を受けるということで結果待ち状態となっている。

(山口委員)

超える金額の半分ということは、15,000円である場合4,200円オーバーするため、その半分の2,100円の補助が出るということか。

(森学校教育部次長)

応募が来ている方のうち10人が釧路地区から阿寒高校へ通っている方で、月額バス代が約30,000円であるため、約10,000円弱の補助が受けられるようになっている。

(岡部教育長)

補助助成の基準を示すよりも、平均助成額の様なものを示したほうがわかりやすくなると思う。

【公開案件】

(4) 学校の現状について

(本川教育指導参事)

報告事項4、学校の現状について報告する。

5月の連休明けから各中学校で、宿泊研修や修学旅行が実施されている。また、6月に入り、小学校では運動会が実施されている。コロナも5類となり、今のところ各学校とも順調に年度当初の計画通り各種行事を行っているところである。そのような中で、前回も報告した通り、教育長訪問、学校経営訪問、指導主事による1次訪問を実施しているが、多くの学校で「釧路市が目指す授業」を意識した取組みがなされており、「子どもが主役の授業」が多々見られる反面、教師主導型の旧態依然とした授業も多くみられ、授業改善については学校指導の最重要課題と捉えて、引き続き取り組んでいく。20日の定例校長会議では、校長先生方に対して、各教師の個々の実態や力量等に応じた、「教師への個別の指導」について改めて呼びかけていく。

6月3日に少年の主張釧路市大会が行なわれた。種村委員にも審査員を務めていただいたが、15名の各中学校・義務教育学校の代表者が熱弁を振るい、今回は幣舞中学校の3年生が最優秀となり、振興局大会に臨むこととなった。

今回で3回目となる市内の中学1年生を対象にしたキャリアシンポジウムが6日に行なわれた。配信拠点を中央図書館として、パネラーの岡部教育長とJCの高橋理事長が自身の仕事内容やなぜこの仕事についたのか、働くことの意義などについて中学生への説明と質疑応答をwebで行なった。約1時間であったが、生徒からの積極的な質問が相次ぎ、スムーズに展開することができた。その後、学級ごとに担任教師による振り返りの授業を実施していただき、山口委員、小出委員、靱山委員には幣舞中学校へ移動して実際の授業も参観していた

だいた。

釧路市の教育推進基本計画が完成し、各学校にも1冊ずつ配布したところであるが、同時にPDFデータも送信し、管理職のみならず全教師の目に触れるよう、そしてここから自校の現時点の実態把握と目標設定に活用するよう呼び掛けたところである。

5月に急遽実施した算数・数学に関するアンケート調査であるが、各学校の理解のもと、小学校3年生から中学校3年生までの小学生3,903名、中学生2,728名の計6,631名から回答を得ることができた。また教員も255名からの回答があり、短期間ではあるが、いずれも対象者のほぼ全員から回答を得ることができた。詳細な分析は現在行っている最中であるが、例えば算数・数学の好き嫌い、興味関心などについては小学校4年生から5年生になった時と中学校1年生から2年生になった時が大きなターニングポイントになることがわかった。また、先生の授業づくりへの課題や不安等は、年代別によってその内容が大きく差異があることもつかむことができた。現在は、それらの原因や今後の課題解決に向けた方策の検討などを行っているところであり、データを授業改善や授業力向上に有効活用して学校に還元していきたい。

教育局からは管理職員候補者名簿の作成と提出、いわゆる教頭や指導主事候補者のリストアップを依頼された。現在、教育政策担当と取り組んでいるところであり、今回から養護教諭や栄養教諭も含むとの通知があった。

最後に小中ジョイントプロジェクトについて、昨年度から本格的に取り組んでいるが、今春の人事異動によって多くの学校で校長・教頭が他町村から転入していることもあってか、十分な進捗状況が見られない校区があることがわかった。改めて今年度の小中ジョイントプロジェクトの重点と実施の留意点等について、校長会議で説明する予定である。

「信頼」の最後に記載したが、授業改善は教師の宿命でもあると捉え、市教委の指導主事を最大限に活用することも含め、学校現場と校長会・市教委が一体となって引き続き根気よく、尚且つ、ある程度の期間で実効性が目に見えるような取り組みを行っていききたいと考えている。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり

(山口委員)

キャリアシンポジウムについて、中央図書館での1時間と、その後、幣舞中学校に移動しての1時間、非常に勉強になる時間を過ごさせていただいた。前半のキャリアシンポジウムで教育長と高橋理事長から、なぜ現在の仕事に就いたのか、そこで何を大切にしながら仕事をしているか、どのようなときに生きがいややりがいを感じるかという話があり、子どもたちは良い話を聞けたと思う。各学校の学級担任の働きかけにもよると思うが、社会人になって頑張っているという話と、中学校1年生の今の学校生活は切り離されているのではなく、今の学校生活の中でこのようなことを大切にすることが将来につながっていくという、現在の中学校生活のありようについて落としこむ必要があるのではないかという印象を受けた。

幣舞中学校の授業を見た感想について、校長先生と教頭先生の配慮で、中学1年生のキャリアシンポジウムに参加したうえで学級内の話し合いを2学級見させていただいた。担任の先生は学校現場としてどのような受け止め方をして、子どもたちにどのようなおろし方が必要なのか、だいたい学校として慣れてきている感じがあった。良い資料を使いながら子どもにおろしていた。また、2、3年生の通常の教科の授業も見させていただくことになり、急に教室へ訪問したが、先生も生徒も動ずることなく自然体で受け入れてくれた。対話的な場面をあえて設定しなくとも、教師の投げかけに対して子どもが自然発生的に周りの子どもたちと情報交換、交流、意見交換し合う場面を、どの学年のどの教科の授業でも見られたことから、普段からすべての先生方が対話的な授業を目指していることが子どもたちに根付いているのだと実感できた。中学校の授業改善が進んでいないというのが定例教育委員会でよく取り上げられていたが、幣舞中学校の授業では中学校の授業改善も確実に前に進んでいるという実感できたため、嬉しく思う。

算数・数学のアンケートについて、平木先生が中心に取組んだ英語のアンケートを受けて、算数・数学もやってみようとして学校現場におろしたものであるが、アンケート数の報告を聞いて、学校現場の協力も得られるようになったのだと嬉しく思った。4年生から5年生、中学1年生から2年生の子どもたちの意識にギャップを感じ、課題が明らかになった。何か手立てを打つときには具体的なデータが必要で、アンケートを取って明らかになったことから、課題を解決する具体的な手立てを教育委員会から学校現場へおろして実践に活かせるように取り組んで欲しい。

(本川教育指導参事)

学校現場の協力を得て、課題と言われている算数・数学の一部ではあるが、客観的なデータを取ることができたため、手立てに関してはいくつか考えている。なるべく早い段階で学校現場に還元し、先ほどお褒めの言葉をいただいたような授業が、どの学級の算数・数学でも現れるように努力したい。

(靱山委員)

キャリアシンポジウムの後に幣舞中学校へ行かせていただき、生徒に今日はどうだったかと質問したところ、「働くのはお金のためだと思っていたが、教育長の話聞いて、やりがいを持って働いた結果、お金につながっていることが分かった」と言っており、すごい発見をしたと思う。自分自身も改めてやりがいについて考えたり、素敵な話を聞くことができ、キャリアシンポジウムの意義をすごく感じた。その際も生徒は活発に手を挙げており、その結果、その場で話すことができなかつた生徒もいると思うが、その質問はこちらに来ているのか。

(本川教育指導参事)

質問については、アンケートに記入してもらうよう伝えてあるが、まだ集約しきれていない。1時間の中で教育長と理事長が話をしながら生徒とやり取りをし、それを受けて各学級で総合的な学習の授業として、感想のほかに考えを言い合ったり、ワークシートに記入してキャリアノートを作ったりしている。後から、教育長と理事長への直接の質問が出るかもし

れないが、新たな気づきなどに関しては授業やワークシートで完結しているため、新たな質問は出てこない可能性もある。もし出てきた場合には中学生と約束した通り、後から教育長と理事長にお答えいただこうと考えている。

(岡部教育長)

過去2年は、ほぼ全員の生徒から質問が出ており、全員に回答している。

(小出委員)

キャリア教育の目的の一つとして社会に役立つ人になるということがあり、また、今回教育長から、やりがいは自分以外の他者に役立つ仕事をする事で得られるという話があった。そのような気持ちを得られるかどうかは、家族や先生以外のほかの大人との関わりがどれだけあるかということが関わってくると思う。そういう意味では、教育に携わっている教育長や釧路の最前線で働いている高橋理事長の話聞くことができ、自分たちと直接関わりのない大人が自分たちを気にかけてくれていることや、自分たちが思っていることに真剣に答えてくれていることを実感できたことは、すごく良い機会だと思う。今は気づかなくても、大人になった時や後々心に残り、自分もそういう大人になろうと思ってもらえたらいいなと感じながら聞いていた。2年生ではジョブカフェが行われるかと思うが、去年、一昨年に参加した際、釧路市内で自分の仕事に誇りを持って働いている大人から直接話を聞き、大人の私がすごく感動した。誇りをもって働いている大人を子どものころに見ることができるのはすごく貴重だと思う。仕事に対してポジティブなイメージを持てると思う。また、2年生のジョブカフェに今回の経験をうまくつなげていけるよう、同じようなイメージを持ち、ジョブカフェに挑むことのできるようにつないでほしい。コミスクも地域の大人と子どもの関りで、社会貢献しようという気持ちを芽生えさせる意味ではつながっていると思う。子どもたちが学校で大人にしてもらったことを覚えていて、自分が大人になったときに同じことをしようと思ってもらえればと思う。今自分自身の生活をどうするかということにも活かして欲しいし、成長して大人になっていく過程でも考えて残るものになっていくのではないかと考えられ、すごく大事な取組みだと感じながら見ていた。

(山口委員)

1年生のキャリアシンポジウムも、2年生のジョブカフェも、各学校のキャリア教育の全体計画の中に位置づいている。教育委員会での取組みも位置付けてもらっていると聞いたが、その中にコミスクでの社会の方々との関わり、地域行事における子どもの参画、地域の方々との関わり、これらも含めて、キャリア教育の範囲の中での人格形成につながっているというデザインが今後必要になってくる。釧路のイベントに子どもたちがただ参加しているだけでなく、将来的にはこのようにつながっていくという全体のデザインも位置付けていくことができれば、子どもたちへのアプローチも違ってくると思うため、これからも考えていってほしい。

(小出委員)

あらかじめ用意していた質問を言うのではなく、教育長と理事長の話聞いたうえで質問もいくつかあったため、積極的で素敵だと思った。